

Piers Plowman 写本の研究 —— Vernon 写本と Skeat 校訂本の比較 ——

Piers Plowman 写本の研究 ——Vernon 写本と Skeat 校訂本の比較——

松 下 知 紀

〇 はじめに

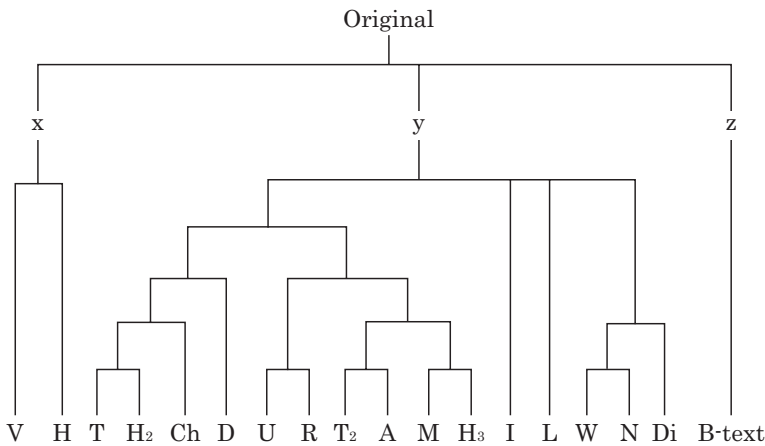
Piers Plowman は 14 世紀後半に William Langland によって書かれた、社会派宗教詩であり、頭韻復興を代表する詩である。この詩は Z テキスト、A テキスト、B テキストと C テキストが存在するので、この詩の全体像を包括的に把握するためには、各テキストの写本の文学的、語学的、文体的研究が重要となる。さらに、Z テキストを除いて、各テキストには 20 から 30 の写本が現在まで伝えられており、総数が 70 に及ぶ写本を把握して研究を進めることが不可欠となる。Z テキストから A テキストを経て B テキストに拡大し、最後に C テキストを構成する過程を探っていくと、Langland の文学的内容の成熟過程が読み取れる。また、文学的表現技法が進化していくことも確認できる。A テキストには大別して 2 種類の校訂本が存在する。一つは Trinity College, Cambridge の A.3.14 写本に基づいて校訂されたもので、Knott-Fowler, Kane, Schmidt の校訂本がこれまでに出版されている。もう一つは、Bodleian Library, Oxford に収蔵されている Vernon 写本の Skeat による校訂本である。19 世紀後半に Early English Text Society 叢書の一冊として校訂された *Piers Plowman: The A-Text* は、20 世紀に校訂された、Knott-Fowler や George Kane や A. V. C. Schmidt による校訂本編纂の魁(さがけ)を飾るものだった。

本稿では、先ず Vernon 写本について触れ、次に Skeat による校訂本の構成と頭韻特徴について言及する。最後に、写本研究における校訂本の統合性と個別性について述べる。

I Vernon 写本

羊皮紙、341 葉、21.5～22x15～15.5 インチの大きさに *Piers Plowman: The A-Text* Prologue-XI 183 が含まれている。この写本は Bodleian Library, Oxford に Vernon 写本として収蔵されている極めて大型の写本で彩色文字によって書かれていて、1370-1380 年 (Skeat, p. xv) か 1380-1400 年 (Serjeantson, p. 222) に作成されたと推定されている。この巨大な写本は 400 枚以上の羊皮紙を含み、2 段組で、80 行で書かれている。その中で、*Piers Plowman* は 394b, col. 2 で始まり 401b で終わっている。写本表紙の内側の四角い紙に、“Bibliothecae Bodleianae Dono dedit Edvardus Vernon Armiger olim ex col. Trin. In hac universitate Superioris ordinis Commensalis in nupero bello civili a partibus regijs strenus propugnabat Militum tribu[nus].” (Skeat, 1867: xv). と記載されていて、Colonel Edward Vernon が 1677 年に Bodleian Library に寄贈したことが分かる。Skeat (xvi) によれば、Vernon 写本は Staffordshire で書かれた、*Piers Plowman: The A-Version* の最古の写本であり、最良に書かれていて、他の写本より優れているが、その写本の最大の欠点は、一葉切り取られていて、Passus 11 の約 140 行が欠けていることである。

写本系統図 (Knott-Fowler 1952: 26)



II Skeat の校訂本の特徴

II. 0 Skeat の編纂方針

Skeat の校訂方針は Bodleian Library, Oxford の Vernon 写本を基本写本として、Trinity College Library, Cambridge の MS R 3.14 (以下、T 写本)、British Library の Harley MS 875 (以下、H 写本)、University College Library, Oxford, MS 45 (以下、U 写本) の内容を統合した校訂本として構成することだった。また、頭韻詩としての性格を維持するために Vernon 写本には含まれていない語彙を *Piers Plowman* の A テキストの写本に限定して採用して、頭韻構造を充たすように変更している。また、綴りが異なる場合は理解可能な単語に変更している。

本稿では、Skeat の校訂本が A テキストの他写本から借用した部分のうち比較的行数の多い部分を検討する。Skeat が基本写本として採用しなかったが、その後 Knott-Fowler, Kane, Schmidt が相次いで基本写本として採用した T 写本を Skeat も引用している。次に、H 写本も Skeat が校訂本を編集する上で注目して援用したことが分かる。また、Skeat は U 写本をラテン語引用文を中心に活用して校訂本を作成した。

このように、V 写本の厳密なテキスト研究を行うことによって、*Piers Plowman: The A Text* の中で V 写本が初期の写本であることを確認できるように、Rigg-Brewer によって研究され始めた Z-Text との位置づけを検討することが可能になる。

II. 1 T 写本からの引用

まず、Skeat が T 写本から引用した箇所を検討すると、Prologue, Passus I, Passus II を中心に約 30 行が引用されている。P, 34; P, 50-51; P, 99-100; P, 109; 1, 106; 1, 149-150; 2, 28-30; 5, 63-64; 5, 97; 9, 4-5; 9, 93 の 1 行から 2-3 行の引用が散見されるのに対して、1, 178-185 の引用は 8 行に及び、第 1 歌の最後の部分に当たり、その構成を豊かなものになっている。

1,178 Pat is pe lok of loue . pat letip out my grace

- 1, 179 To counforte þe carful . Acumbrid wip synne.
 1, 180 Loue is þe leueste þinge . þat our lord askiþ
 1, 181 And eke þe graiþ gate . þat goþ into heuene.
 1, 182 For-þi I seiþe as I seide er . be siþte of þise tixtes,
 1, 183 Whan alle tresouris arn triþede . treuþe is þe beste.
 1, 184 Now haue I tolde þe what treuþe is . þat no tresour is betere,
 1, 185 I may no lengere lenge . now loke þe oure lord."

「これが愛の鍵であり、その鍵をあけて、罪に苦しみ疲れた悲惨な人びとを慰めるために、私の恩義を与えるのです。愛がわれらの主が私たちに最も期待する非常に大切なもの、また天国に至るまっすぐの路でもあるのです。ですから、これらの聖句をあかしとして、いま一度言っておきましょう。すべて財産をためしてみると、＜真理＞が一番よいものです。＜真理＞は何であるか、またどんな宝物もこれほどよくはないことを、今お話ししました。もうゆっくりはしていられません、主が汝を守り給え（ごきげんよう）。」（注1）

II. 2 H 写本からの引用

次に、H 写本からの引用を検討すると、Passus I と Passus II を中心に約 40 行引用されていて、V 写本の成立時には記述されていない部分を Skeat が追加していることが理解できる。1, 49; 1, 103; 1, 150; 1, 176-177; 2, 31; 2, 34; 2, 59; 2, 95-96; 2, 182; 3, 19-20; 3, 66; 3, 98; 3, 112; 3, 234; 5, 182; 6, 1-2; 6, 5; 8, 46; 8, 55; 8, 101; 8, 125-126 などは 1 行から 2-3 行のわずかな修正を追加したことが確認されるが、次の 3 つの引用は長く H 写本の特徴を示している。

- 2, 111 herto assentid syuyle . but symonye ne wolde
 2, 112 tyle he had syluer . for his sawes & his selynge.
 2, 113 Þen fet fauel forth . floreyne I-nowe,
 2, 114 & bad gyle go to . & 3yue gold aboute,

- 2, 115 & namely to pis notaries . pat hem non lacked;
2, 116 & feffe false wnesse . with florens I-nowe,
2, 117 For he may mede a-maysteren . & make hir at his wylle;
2, 118 For where falsenes is oft fownden . pere feip faylep
2, 119 Poo þe gold was 3ouen . grete were þe thonkes
2, 120 to false & to fauel . for her feyre 3yftus.
2, 121 many comen, from care . to counforte þe false,
2, 122 & sworn on þe hoolydom . pat "cesse schul we neuere
2, 123 or mede be pi weddud wyf . þorou3 witte of vs alle.
2, 124 for we han mede a-maysterd . wiþ oure myri wordis
2, 125 Pat heo graunteþ to goo . wiþ a good wille,
2, 126 to london to loke . if þe lawe wole
2, 127 Iugge 3ou Ioyntely . to be Ioyned for euer".

「＜民法＞はそのこと〔彼のロンドン出頭の提言：松下〕に同意したけれども、＜聖職売買＞はなんとしても同意しようとはしなかった、自分の調印や署名に対する相応の謝礼の銀貨が支払われるまでは、そこで、＜追従＞は沢山のフローリン金貨を持ってきて、＜欺瞞＞に言いつけて一同に差し上げるよう命じた。「とりわけ、公証人の方がたには、一人ももらいそこないのいように。それから、＜虚偽の申し立てをする証人＞には沢山のフローリン金貨を贈りなさい。なぜなら、彼は＜報酬＞を手なづけ、彼女の扱いを私の自由に任せてくれるだろうから。」

金貨が配られると、みんなはこのすばらしい贈り物に対して＜虚偽＞と＜追従＞にひどく感謝感激し、そばにやって来て、＜虚偽＞の不安な気持ちを取り除き、励ますように言った、「本当に私どもはどこまでもお力になりますよ、私たちみんなの策略によって＜報酬＞があなたの正式の奥様になられるまでは。私たちは楽しい話をしながら＜報酬＞を説得しておきました。あなた方お二人が永遠に結婚の喜びに入れるように＜法律＞が判定するかどうか知るために、彼女が喜んでロンドンへ出かけて行くことを承諾するようにと。」（注 2）

さらに、引き続き次の引用が行われている。

- 2, 135 & fals on a sysoures backe . pat softly trotted;
2, 136 for falsnes aȝeyn þe feiþ . sisoures he defouleþ,
2, 137 þoruȝ comburance of couetyse . clymben aȝeyn truþe,
2, 138 þat þe feiþ is defouled . & falsly defamed,
2, 139 & falsnes is a lord I-woxe . & lyueþ as hym lykep:
2, 140 Fauel on a feyre speche . ful feyntly a-tyred;
2, 141 For feire speche þat is feiþles . is falsnes broþer;
2, 142 & þus sysoures ben sompned . þe false to serue,
2, 143 & feire-speche fauel . þat moche folke desceyueþ.

「＜虚偽＞は軽快に速歩する巡回裁判所陪審員の上に跨った。というのは、真実に背いて嘘をつき巡回裁判所陪審員を墮落させると、＜食欲＞に圧倒されて＜真理＞によじ登り、＜真理＞が墮落されて不当に恥辱されると、＜虚偽＞が王になり、気の向くままに生活を送った。＜追従＞はきれいに着飾って＜巧言＞にまたがった。こうして、巡回裁判所陪審員たちが、＜虚偽＞と多くの人びとを騙した言葉巧みな＜追従＞に仕えるために召喚された。」（松下訳）

また、第3歌にも V 写本にはない次の引用が H 写本から校訂本に挿入されている。

- 3, 91 Now beoþ ȝe war, if ȝe wole . ȝe maysturs of þe lawe;
3, 92 for þe soþe schale be souȝte of ȝoure soules . so me god helpe,
3, 93 þe suffraunce þat ȝe suffre . such wrongus to be wrouȝt;
3, 94 While þe chaunce is in ȝoure choyse . cheose ȝe þe best.

「さあ、もしあなたがたが望むならば、法律学者たちよ、気をつけなさい。というのは、真実があなたがたの魂から求められますように、神よ救い給え。

あなたがたはそのような悪行が行われることを許容するが、幸運をあなたが選択できるうちに、最善のものを選びなさい。」(松下訳)

II. 3 U 写本からの引用

最後に、U 写本からの引用について検討すると、Passus V を中心に約 10 行ほどが利用されている。U 写本が注目される機会は少ないが、独自性を持つ写本であり、*Piers Plowman: The A-Text* 全写本を研究する上で役割を担うことが想定される。4, 119 のほかに第 5 歌には 6 行の引用が追加されている。

- 5, 202 Clement þe coblere . cauȝte glotoun by þe mydle,
5, 203 And for to lyfte hym aloft . leide hym on his knees;
5, 204 And glotoun was a gret cherl . and grym in þe lyftyngre,
5, 205 And cowhede vp a cawdel . in clementis lappe,
5, 206 Pat þe hungriest hound . of hertforde schire
5, 207 Ne durst lape of pat laueyne . so vnloveli it smakith.

「靴屋のクレメントが、胴をかかえて起きこそうと、自分のひざにかかえあげたが、＜大食＞は、図体が大きいので、とても重たくて起きこせない。そのうち、例の小間物をクレメントのひざに吐きだした。ハートフォード・シャーの犬も、この残り物ばかりは遠慮するはず、とにかくひどいにおいをただよわせたものだ。」(注 3)

II. 4 ラテン文の他写本からの引用

また、ラテン語引用文の追加について触れると、Skeat は V 写本にいくつかの写本からラテン語引用文を追加して校訂本を作成した。このような詳細な検討をすることにより、個別写本の位置づけと写本間の相互関係を確立できる。別の写本から引用された行として次の行がある。7, 227 (H), 7, 237 (THU), 8, 187-188 (TUH2D), 10, 41 (UTH2), 10, 92 (U), 10, 108 (UT), 11, 145 (D).

III. Skeat による頭韻の校訂

Vernon 写本の頭韻語を Skeat が別の A テキスト写本から引用して頭韻詩の形式にふさわしい頭韻型を形成している。統合型の校訂本を作成する場合、どの編者もこのような方式を採用する傾向があるが、写本の特異性を記述する立場からすると、写本間の有意味な差異が失われるという結果をもたらし、厳密な写本研究にとって必ずしも望ましい方向を示さないことになる。

Skeat の校訂について、後半行において第一強勢を担う最初の語が頭韻に一致する語に変更されている場合を先ず検討し、次に、前半行において第一強勢を担う最初の語が頭韻に参加する語に変更する場合を検討し、最後に、前半行において第一強勢を担う 2 番目の語が頭韻に参加する語に変更する場合を検討する。

III. 1 aaAx の A 頭韻語の変更

後半行の最初の第一強勢を担う語が頭韻に参加することにより、前半行の頭韻語と関係を維持することになる。しかし、V 写本には後半行の最初の強勢語が頭韻に参加しない行があり、Skeat はそれらの語を他の写本において頭韻に参加している語に交代して校訂本を作成した。例えば、Prologue 14 において、V 写本と H 写本が *wonderliche* であるのに対して、T 写本が *trizely* であり、Skeat が頭韻を充足するために T 写本から *trizely* を採用したことが分かる。校訂された後半行の最初の強勢語が頭韻を踏む語に変更された箇所が 38 箇所あることを考えると、この位置が頭韻詩において不可欠な頭韻の位置と Skeat が見なして作業を行ったことが分かる。

P, 14 I sauh a **Tour** on A **Toft** . *trizely* I-maket;

[VH *wonderliche* > T *trizely*]

P, 41 Til heor **Bagges** and heore **Balies** . weren *bratful* I-crommet;

[VH *faste* > T *bratful*]

1, 9 Of oper **heuene** pen **heer** . *holde* þei no tale."

[V *ʒeuep*, H *ʒyue* > TUDH2 *holde*]

- 1, 72 What heo **weore witerly** . pat **wisside** me so feire.
[V **techep** > TH2 **wisside**]
- 1, 94 And **take trespassours** . and **teizen** hem faste,
[V **bynden**, H **bynde** > T **teizen**]
- 2, 38 Pat **Fals** opur **Fauuel** . bi eny **fyn** heolden,
[V **peyne** > THUH2D **fyn**]
- 2, 85 Such **Weddyng** to **worche** . to **wraþpe** with truþe;
[V **teone** > THUH2D **wraþpe**]
- 3, 72 To þe **pore people** . pat **percel-mel** buggen.
[V pat al schal a-buggen > TUD **percel-mel**]
- 3, 107 "3e, **lord**," quap pat **ladi** . "**Lord** for-beode hit elles!
[VH **God** > TUD **Lord**]
- 3, 258 **Coueytede** feir **catel** . and **culde** not his Beestes,
[VH **slouh**, **slow** > TH2UD **culde**]
- 4, 69 To **ouercome** þe **kyng** . with **catel** 3if heo mihten.
[VH **Meede** > TUD **catel**]
- 5, 58 **Drinken** bote with þe **Doke** . and **dynen** but ones.
[VH **eten** > TU **dyne**]
- 5, 199 As hose **leip lynes** . to **lacche** wip Foules.
[V **cacche** > TU **lacche**]
- 6, 30 **Clene Conciene** and wit . **kende** me to his place,
[VH **tau3te** > TU **kende**]
- 6, 99 For he hap **Envye** to **him** . pat in þyn **herte** sitteþ;
[V **sitteþ** in þyn herte > TUD in þyn **herte** sitteþ]
- 6, 103 **I-kei3et** and **I-kliketed** . to **kepe** þe þer-oute;
[V **holden** > TD **kepe**]
- 6, 126 Pou mai3t **gete grace** þer . so pat pou **go** bi-tyme."
[V **come** > TUD **go**]
- 7, 23 "**Bi Crist**," quap a **kniht** þo . "þou **kennest** vs þe beste!
[V **techest** > HU **kennest**]

- 7, 126 3e **eten** pat pei schulden **eten** . pat **heren** for vs **alle**;
[V **swynken** > T **eren**, HU **erien**]
- 7, 250 Keep **sum** til **soper** tyme . And **sit** pou not to Longe,
[VH **faste** > TU **sit**]
- 7, 256 pat **Fisyk** schal his **Forred** hod . for his **foode** sulle,
[V **lyflode** > THU **foode**]
- 8, 120 And **Concience com** aftur . and **kennide** me betere."
[VH **tau3te** > TU **kennide**]
- 8, 124 On **Salamones sawes** . **seldom** pou bi-holdest;
[V **luitel** > U **seldom**]
- 8, 128 And þorw heore **wordes I a-wok** . and **waitide** aboute
[V **lokede** > THU **waitide**]
- 9, 11 And **preiede** hem, **par** Charite . er pei **passede** furre,
[V furre **passede** > TUH2 **passide** ferþere]
- 9, 20 {**Ergo**}, he nis not **alwey** . at **hom** among ow Freres,
[V a **tom** > TH2 at **hom**]
- 9, 32 Per weore þe Monnes **lyf I-lost** . þorw **lachesse** of himselue.
[V **sleupe** > TUH2 **lachesse**]
- 9, 64 "Pat þow **wost wel**," quod he . "and no **wi3t** betere."
[V **bodi** > TUH2 **wi3t**]
- 10, 30 Þe **lord** of **lyf** and of **liht** . of **lisse** and of peyne.
[VU **Blisse** > TH2 **lisse**]
- 10, 31 **Angeles** and **alle** þing . **arn** at his wille,
[V **ben** > TUH2 **arn**]
- 10, 95 **Catoun Counseileþ** so . tak **kepe** of his teching,
[V **hede** > UTH2 **kepe**]
- 10, 165 'Beestes pat now **ben** . mouwen **banne** þe tyme
[V **curse** > TUH2 **banne**]
- 10, 190 Bote 3if pei **boþe ben** forswore . pat **bacoun** pei tyne.
[V and **Cursen** pat tyme > TUH2 pat **bacoun** pei tyne]

- 10, 213 And þat is **wikkede wil** . þat Mony **werke** schendeþ.
 [V **men** > H2T **werke**]
- 11, 71 And **makeþ Men Misbileeue** . þat **musen** on heore wordes.
 [V **leeuen** in > T **musen** on]
- 11, 134 Of **Carpunters** and **keruers** : I **kende** furst Masouns,
 [V **tauȝte** > TH2 **kende**]
- 11, 137 For þe **more** I **muse** peron . þe **mistiloker** hit semeþ,
 [V **studie** > TUH2 **muse** / V **derkore** > TU **mislokere**]
- 11, 138 And þe **deppore** I **diuinede** . þe **derkore** me pouȝte.
 [V **misloker** > T **derkere**]

III. 2 aaAx の第一 a の変更

次に前半行の最初の頭韻語が占める位置について検討する。Skeat が校訂を行った箇所は 13 箇所であり、多くはない。しかし、V 写本以外の写本では T 写本を中心に強勢を担う語が頭韻に参加していることに Skeat は注目して、頭韻を踏む語に変更している。

- 2, 160 I haue no **tome** to **telle** . þe **Tayl** þat hem folweþ,
 [V **while** > T **tome**]
- 2, 171 Schal neuer **mon** vppon **Molde** . **Meyntene** þe leste,
 [V **non** > TH **man**]
- 2, 200 For to **wone** with hem . **watres** to loke. [V **ben** > THUD **wone**]
- 7, 25 Bote **kenne** me," quod þe **kniht** . "and I-chul **conne** erie;
 [V **tech** > TU **kenne**]
- 8, 109 And bote ȝif **luke lyȝe** . he **lereþ** vs a-noper;
 [V þe **Bok** > UT ȝif **luke**]
- 9, 24 Bi a **forebisene**," seide þe **frere** . "I schal þe **feire** schewe.
 [V **ensaumple** > TUH2 a **forebisene**]
- 10, 59 And eke in **sottes** þou miht **seo** . þat **sitteþ** atte Ale;
 [V **wrecches** > UTH2 **sottes**]

10, 71 Bote vche **wist** in pis **world** . pat hap **wys** vnderstandinge,

[V **mon** > T **wist**, U **wighd**]

11, 85 And al **worp** as pou **wolt** . **what** so we tellen!

[V **beo** > TUH2 **worp**]

11, 102 **Kenne** me **kuyndely** . to **knownen** what Is Dowel."

[V **Teche** > TH2 **Kenne**]

11, 104 I schal **kenne** pe to my **Cosyn** . pat **Clergye** is I-hoten.

[V **teche** > TUH2 **kenne**]

11, 122 Pat eche **wyzt** beo in **wil** . his **wit** pe to schewe.

[V eueri **mon** > YTH2 eche **wyzt**]

11, 180 **Actif** it is **I-hoten** . **hosebondes** hit vsen;

[V A **lyf** > TUH2D **Actif** it]

III. 3 aaAx の第二 a の変更

前半行の二番目の強勢を受ける語が頭韻を踏む語に変更されている行は 7 行である。この位置は先の場合と異なり、頭韻に義務的に参加しなくても許容されるように思われる。

1, 4 **Com** a-doun from pe **clyf** . and **clepte** me feire, [VH **loft** > UDH2 **clyf**]

2, 14 And **Rod riht** to **Reson** . and **Rounded** in his Ere,

[V **Concience** > THUD **Reson**]

9, 88 A **pyk** is in pe **potent** . to **punge** a-doun pe wikkede,

[V pe **ende** > TH2 in pat **potent**]

10, 124 A-Mong **men** of pis **molde** . pat **Meke** ben, or kuynde;

[V **World** > TU **mold**]

11, 79 For alle pat **wilneþ** to **wite** . pe **weyes** of god Almihti,

[V **two** > UTH2 to **wite** pe]

11, 131 **Gramer** for **gurles** . I **gon** furste to write,

[V **children** > H2TU **gurles**]

11, 137 For pe **more** I **muse** peron . pe **mistiloker** hit semeþ,

[V **studie** > TUH2 **muse**]

IV 写本研究における校訂本の統合性と個性

古英語期に書かれた *Beowulf*, *The Dream of the Rood* などや、中英語期に書かれた *Sir Gawain and the Green Knight* などの作品は単一の写本しか現存せず、写本間の対比的研究を行うことは不可能である。それに対して、中英語期の多くの作品は複数の写本が現在まで伝えられている。*Piers Plowman* の場合、前述のように約 70 写本がイギリス国内を中心に所蔵されている。Skeat は 19 世紀半ばに A、B、C テキストについて多くの写本を検討し、各テキストの校訂本を上梓している。A テキストについていうと、Bodleian Library の Vernon 写本に含まれる詩行を主体に校訂作業を行った。この Skeat の校訂方法が伝統的に引き継がれて、中世英文学の諸作品が校訂されてきた。伝統的な校訂本は作品全体を統合的視野で見るためにこれまで主導的な役割を果たした。従来図書館の写本室で収蔵されたままになってきた写本に光を当て、中世英文学の全体像を明らかにしたという点で偉業と高く評価できる。

しかし、ある作品に存在する複数の写本には、制作年代、制作方言、内容において様々な相違が認められる。このような写本の持つ個性についての研究が重要性を増してゆくと思われる。例えば、Furnivall による Chaucer の *The Canterbury Tales* の 6 写本の並列転写テキストは重要な言語研究の資料となっている。また、*The Owl and the Nightingale* などの作品については転写テキストを対比する形で写本の個性が重要視されているし、近年、久保内瑞郎他による *Ancrene Riule* の写本別転写テキストの並列は従来の写本研究をまったく新しい視点から捉えた優れた業績といえる。

今後の写本研究の視点から重要なことは、写本の個性を最も重視して、写本の語彙、文体、統語、文学的内容などを詳細に研究してゆくことである。

写本間において語彙の相違が生じている場合、写字生の言語を反映していると考えられる。方言差や時代変化によって言語に差異があり、それを反映したと考えられる。

また、頭韻に参加する語彙が変化した場合、頭韻の機能が弱まったと考えられる。*Piers Plowman* の頭韻の規則性は他の中英語期の頭韻復興の詩に比べて、頭韻の規則性が弱いという事実を写本レベルで示すことになる。さら

に、統語論の立場から見ると、以前は頭韻を成立させるために、行われていた「詩的許容」がもはや存在しなくなり、日常の言語を反映した統語構造だけが認められることになる。また、文学的な内容についても、地域や時代の変化によって訂正されてきたとも考えられる。写本の個別性を重要視して写本を相互に比較検討すれば、一層深い作品研究が行われることは確かである。

＜写本研究の意義＞

a) 写本言語の統一的な研究と特定写本の文学的特徴を確立：

単独の写本に焦点を当てて研究することにより、当該写本独自の構成・言語・文体・文学性を明らかにすることが可能になり、各テキストの写本間の成立関係が明示できる。今回の研究では、V 写本の文体も頭韻詩としては未発展な段階であり、構成も他の写本がより豊かな文学的表現を加えていることが分かる。

b) 写本の時代背景の比較：

政治的な出来事や自然災害について具体的な記述が限定した写本に記述されている場合、記述されていない写本と区別するひとつの根拠になるかも知れない。しかし、文化財の研究に利用されている、残留炭素分析法のような科学的手法を応用して、インクや羊皮紙の年代調査も可能になるだろう。

c) 作家や写字生の意図：

V 写本の写字生は **Langland** にとってどのような位置を占めるだろうか。高い品質をもつ **Vernon** 写本は上質の羊皮紙に豊かな装飾をちりばめられて書かれていて、他の *Piers Plowman* 写本とは異質である。その写字生として選ばれた人間は教養に恵まれ、**Langland** の作品を単に書き写すだけではなく、鑑賞し批評的な態度で読んでいただろう。今後、V 写本の語学的な特徴を捉えた後に、写字生の精神性についても研究してゆかなければならない。例えば、U 写本から **Skeat** 校訂本に引用された 5, 202-07 は **Kane** (1960 : 292) において、B テキスト 5, 358-63, C テキスト 7, 409-14 と密接に関連していると指摘されていることに注目しなければならない。

V まとめ

本稿は、Langland の *Piers Plowman: The A-Text* の最も古い Vernon 写本を取り上げて、Skeat の校訂特徴を検討した。Vernon 写本は H 写本と高い類似性を示すが、T 写本などとは異なる性質をもっている。頭韻語の特徴から Vernon 写本は頭韻型を厳密に守っていない行が多く見られるのに対して、T 写本では頭韻型を守る傾向が見られる。

注

本稿で使用された写本の省略記号は次の通りである。V: Bodl. English Poetry a.1 (olim Vernon); T: Trinity Col. Cambridge, MS R. 3.14; U: University Coll. Oxford, MS 45; H: BL Harley MS 875, D: Bodl. MS Douce 323; H2: BL MS Harley 6041.

この研究の一部に *English Poetry Full-Text Database* (Chadwyck-Healey Ltd.) の *The Vision of William Concerning Pers the Ploughmon, The Vernon Text: or Text A* を利用している。本研究はその一部に平成 15 年度・16 年度の専修大学研究助成・個人研究「*Piers Plowman* の写本研究」を受けている。また、日本語訳の作成の段階で A.V.C. Schmidt 先生 (Balliol College, Oxford) にご指導いただいた。

1. ラングランド『農夫ピアズの幻想』池上忠弘訳、32 ページ。
2. 同書、38 ページ。
3. ラングランド『農夫ピアーズの夢』柴田忠作訳、135 ページ。

参考写本

V: Oxford, Bodleian Library English Poetry a. 1 (the Vernon Manuscript)

T: Trinity College MS R.3.14

U: University College Library, Oxford MS 45

D: Bodl. MS Douce 323

H: BL MS Harley 875

H2: BL MS Harley 6041

参考文献

Brewer, Charlotte. 1996. *Editing Piers Plowman*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kane, George ed. 1960. *Piers Plowman I: The A Version*. London: The Athlone Press.

- Knott, Thomas A. and David C. Fowler eds. 1952. *Piers the Plowman*. Baltimore: The Johns Hopkins Press.
- Langland, W. trans. by T. Ikegami. 1993. 『農夫ピアズの幻想』 (*The Vision of Piers Plowman: The A-Text*). 東京: 中央公論社.
- Langland, W. trans. by Ch. Shibata. 1981. 『農夫ピアズの夢』 (*The Vision of Piers Plowman: The B-Text*). 東京: 東海大学出版会.
- Samuels, M. L. 1988. "Dialect and Grammar," John A. Alford ed. *A Companion to Piers Plowman*. Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 201-21.
- Schmidt, A. V. C. ed. 1995. *William Langland: Piers Plowman: A Parallel-Text Edition of the A, B, C and Z Versions*. London and New York: Longman.
- Serjeantson, Mary. 1937. "The Index of the Vernon Manuscript", *MLR*, xxxii: 228-61.
- Skeat, Walter W. ed. 1867. *The Vision of concerning Piers Plowman I: The A-Text*. EETS. OS. 28. London: Oxford University Press.